

《インタビュー記録》

歴史教育体験を聞く

木下康彦先生

日時：2016年6月13日・9月11日

場所：東京都杉並区宮前

聞き手：茨木智志・鈴木正弘・大木匡尚

はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を中心として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回のインタビューは、木下康彦（きのした やすひこ）先生がお引き受け下さった。木下先生は1937年のお生まれで、大学卒業後の1964年から各地の高校で世界史を担当し、1988～94年に文部省で教科調査官・視学官として学習指導要領の作成等に携わり、その後、大学で教鞭をとられてきた。その間に世界史や社会の教育に関わる多くの論稿を著わしている。

以下は、木下先生のインタビューの記録である。

1. 生い立ち

— 本日はよろしくお願いたします。まず、生い立ちからお聞かせ下さい。

昭和12（1937）年4月生まれです。今年79歳で、来年で80歳になります。生まれは東京の中野区桃園町¹で、その後、東中野に移りました。最初の記憶は3歳のときの「紀元二千六百年²」の花電車です（1940年）。父に連れられて見ました。

戦争が始まるまでは、近所にアメリカ人のパン屋さんがいました。母が大阪女子大学の前身の専門学校³の英文科を出ていましたので、仲よくしていました。だんだん戦争がひど

¹ 東京府東京市中野区桃園町：現在は東京都中野区中野3丁目。

² 紀元二千六百年：1940（昭和15）年は神武天皇即位2600年であるとして、各地でこれを記念した行事や事業が行なわれた。

³ 大阪府女子専門学校：戦後に大阪女子大学となり、2005年からは大阪府立大学（堺市区など）となっている。

くなると、そういう交流がなくなっていました。近所のノービル幼稚園⁴というキリスト教会附属の幼稚園に入ります。別に信者ではなかったのですが、そこで教わった讚美歌はまだ覚えています。

幼稚園の途中で、父の仕事の関係で大阪の堺市に引っ越しました。ちょうど戦争が始まる頃ですね。堺市立第一幼稚園（堺市堺区）は軍国主義教育で、鉄砲の形の木の棒を持って「きちくべいせい」（鬼畜米英）とやっていました（笑）。東京弁を話していましたので、〈江戸っ子さん〉とからかわれました。次男坊で腕白でしたので、いつもいじめかえして、近所の通りではガキ大将みたいになっていました。幼稚園の年長組のころでした。

昭和 19（1944）年に小学校に入ります。当時は国民学校でした。「ちんおもうに わがこうそこうそう くにははじむることこうえんに とくをたつることしんこうなり…⁵」と教育勅語を覚えさせられました。

— 1年生で、ですか。

1年生で、です。校長先生が白い手袋で教育勅語を出して読んでいるのを、みんなが聞いていました。国語の教科書は「アカイ アカイ アサヒ アサヒ⁶」でした。腕白ばかりしていました。

アツ島玉砕という歌がありました⁷。「山崎大佐指揮をとる」という、その歌を歌って学校に行ったことを覚えています。空襲の警戒警報が発令されると、児童に炊き出しのおにぎりとパンを持たせて帰らせていました。妹は小学校に上がる前でしたが、警戒警報が出るとパンが食べられるので「けいかい」「けいかい」と言って喜んでいました。そういう時代でした。

空襲もひどくなってきたので、私ひとりだけ、祖父のいた滋賀県に行きました。縁故疎開になります。父の実家でした。甲賀郡の寺庄^{てらしょう}というところでした。後に甲南町になりました（現在は甲賀市甲南町）。兄と妹は母とともに残って半年ほどで滋賀に来ました。そこでもいじめられましたが、大阪で喧嘩慣れしていましたので、またガキ大将の一人になっていました。4月生まれで体が大きかったこともあり、「少年期」という映画があって、都会から疎開で来ていじめられる内容でした。戦後にやってきた兄はそんな状態でしたが、自分は幼かったこともあり、かわいがられました。

⁴ 中野教会附属ノービル幼稚園：現在は日本同盟基督教団中野教会附属上ノ原幼稚園（東京都中野区東中野）。

⁵ 「教育ニ関スル勅語」、1890年10月30日。学校での式典では校長が「奉読」し、児童・生徒は暗唱することが求められた。「朕惟フニ我カ皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ…」と始まる。

⁶ 文部省『ヨミカタ 一』1941年、6～7頁。国民学校初等科国民科国語の児童用の国定教科書であった。

⁷ 「アツ島血戦勇士顕彰国民歌」：アリューシャン列島のアツ島守備隊（隊長・山崎保代大佐）が1943年5月に米軍の攻撃により全滅した。このとき大本営発表として「玉砕」という言葉が初めて使われた。

⁸ 空襲に対して第一段階で「警戒警報」が、第二段階で「空襲警報」が発令された。

⁹ 「少年期」：波多野勤子の息子との往復書簡集『少年期』（1951年）を原作として同年に公開された映画。

2. 敗戦後の学校

— 8月15日(1945年)はどちらにいましたか。

敗戦は2年生でした。玉音放送は滋賀で聞きました。近所で集まって聞いていたと思います。何を言っているのかよく分かりませんでした。負けたということは周りの大人が言っていました。

学校に行くと、しばらくすると民主主義に変わりました。墨塗りをして、教科書が一時なくなって、最初に配られた教科書が新聞紙をたたんだような、ちゃちなもので、糸で綴じました¹⁰。ノートがなくて、しかもザラザラの紙で、ぼろぼろの鉛筆で書くと鉛筆も引っかかって書きにくかったのを覚えています。

— 戦後の小学校で印象に残っていることは何でしょうか。

コア・カリキュラム教育¹¹が行なわれていました。3年生・4年生になると、学校に行くとき授業がないわけです。「お仕事」と書いてあって、みんなが自由に好き勝手にやっていました。それから、コア・カリキュラム教育も形を成してきて、〈何とか調べ〉とかあって、例えば、〈交通調べ〉とかあって、道を通る車の数を橋で調べました。田舎だからめったに来ません(笑)。それでみんな橋の下で泳いだりして遊んでいました。

6年生のときは自由研究の発表がありました。グループ学習です。たまたま子供用の雑誌に蒸気機関車のことが出ていたので、機関車の構造を調べました。シリンダーの構造とかを模造紙に描いたり、貴生川駅(甲賀市水口町)に機関車があったので、そこに行って聞いたりして発表したら、県大会に出ることになりました。当時、客車は進駐軍に取られていたので貨車に乗って、大津市まで行きました。ところが、大津あたりの学校では指導も進んでいて、朝顔の観察記録とかちゃんとしていましたが、私は機関車の構造だけでした。でも3位かなんかになって、ノートを20冊くらいもらって嬉しかったのを覚えています。

算数は二桁の足し算と引き算ばかりやらされて、本当に退屈でした。私は消化酵素に興味を持っていたので生理学の本を先生から借りてペプシンとかペプトンとか酵素の一覧表を作ったりしていました。また、子供の雑誌にたまたまドン・キホーテの劇が出ていて、それを自分で演出して、上演したことがありました。

カリキュラムが整備されていないので、やりたいことはできましたが、悪いこともしました。掃除当番の人数が多いので勝手に私が選別して班を作って、余っていた半分くらい

¹⁰ 1946年度の教科書は、戦争中の教科書から不都合な部分を削除して新聞用紙に分冊で印刷して製本もせずに学校に配布した。暫定教科書などと呼ばれる。

¹¹ コア・カリキュラム運動：社会科等を中心課程に据えて教科の統合を図った教育課程の編成と実践を進めた運動。米国の影響により1949年頃から1950年代初めに日本でも盛んに取り組まれた。

の連中を学校の裏の竹藪に連れて遊んでいたこともありました。帰ってきたら担任の女性の先生が「みんなが言うことを聞かない」と言って教壇で泣いていて、みんなで土下座して謝ったこともありました（笑）。

— 当時は若い先生が多かったと聞きますが。

代用教員¹²の先生が多かったですね。今でいう高校 2 年を出てすぐにやっている人もいました。自信もなかったのでしょうかね。

— 当時の小学校での経験を、現在はどのように感じられていますか。

現在、総合学習（総合的な学習の時間）があります。あれは、コア・カリキュラムとやり方が同じですね。総合学習は指導について色々出されましたが、この頃のコア・カリキュラムは、まず教科書も指導方法もなく、ただアメリカから来たデューイ（John Dewey）の理論などに従って、遊びながら学ぶというそれだけでグループ作って調べさせて発表させたわけです。それはもう好きなことをやっていた。好きなことはやるのですが、だけど万遍なくはやらないわけです。だから何もしない者は遊んでいるだけです。何も覚えません。〈6・3制、野球ばかりがうまくなり〉と、そういう経験をしました。小学校のときは系統的にきちんと学ばないと。ただ「やりなさい」ではだめで、何をやるか、何のためにやるか、どうやるかを指導しないと、総合学習もうまくいくわけがありませんね。

— 中学校についてお聞かせ下さい。

昭和 25（1950）年に甲南町立甲南中学校¹³に入学しました。50 名ほどのクラスが 4 クラスある学年でした。先生がたも大変だったと思います。2 年生の途中で東京の杉並区立宮前中学校（杉並区宮前）に転校しました。

— 当時の中学校の授業はどのようなものでしたか。社会科とは別に日本史があった時期のはずですが¹⁴。

社会科はもちろんありましたが、記憶に残っていません。日本史で覚えているのは、2 年生からやったことです。『くにのあゆみ』を使いました¹⁵。宮前中学校での日本史では、

¹² 代用教員：教員資格を持たない教員を一般的に指す言葉。戦前から戦後のある時期まで特に地方の小学校教育は代用教員に支えられていた側面があった。

¹³ 甲南町立甲南中学校：現在の甲賀市立甲南中学校（滋賀県甲賀市甲南町）。

¹⁴ 中学校の社会科は 1947 年に「社会」と「日本史」（当初は「国史」）で始まった。後に「日本史」の別枠はなくなったが、「日本史」教科書を使用した「日本史」授業が継続していた。

¹⁵ 『くにのあゆみ』は 1946 年に国民学校初等科 5・6 年生用に上・下 2 冊で発行された国定教科書である

先生が黒板に文章を書いて、生徒がそれを写すという授業でした。先生も慣れていなかったのですね。若い先生でした。英語や数学はちゃんとやったのか覚えています。国語はローマ字論者の先生がローマ字を書いていました。あまり気のはしなかったですね。私は戦前の本が家にあったので、ずっと読んでいましたし。

— どのようなものを読んでいましたか。

小学生のころから色々な本を読んでいました。雑誌で覚えているのは『ぎんのすず（銀の鈴）』（広島図書）、『動く実験室』（少年文化社）があり、愛読していました。『銀河』という新潮社の少年用の文芸色の強い雑誌もありました。母が持っていた坪内逍遙訳の『ハムレット』とか、父が持っていた世界探偵小説のシリーズがあって、ルコック探偵¹⁶とか、覚えています。小学6年生の頃はバートン版¹⁷のアラビアン・ナイト。昔の本でしたから、途中は伏字で「×××」とありました。それを“想像たくましくして”読んでいました（笑）。江戸川乱歩のちょっとエロ・グロのものも読みました。6年生のときに読んでいたら、先生に叱られました。それから、祖父が持っていた立川文庫¹⁸がたくさんあって、『塚原ト伝』とかも読んでいました。父は洋風のを色々持っていました。あの頃はカタカナの名前が全部漢字で書いてありました。

3. 東京都立西高等学校

— 進学された東京都立西高等学校（杉並区宮前）について、お聞かせ下さい。

高校は、昭和28（1953）年に都立西高校に入学しました。

面白い先生がたがたくさんいました。世界史は石川先生、ドイツ史でした。地理は猿渡先生。社会の中村先生はメーチャンと呼ばれていました。物理は中込先生で、タコと呼ばれていました。旺文社の参考書をたくさん書いていました。国語の中村先生は、世間離れた先生でした。英語は増田先生と太田先生。太田先生の英文法の授業を遅らせるために、クラスで誰か質問しないと、ということで、難しい文法書を買ってきて質問しました。中には研究社の大英和辞典を抱えてきて質問し、それで1時間遅らせた者もいました（笑）。ずいぶん難しいものもやっていました。ギッシングの『ヘンリー・ライクロフトの私記』とか、授業で講読していました。一番面白いのは、生物の篠崎先生ですね。授業を聞いても難しくて全く分からないけど、人柄もよく人気がありました。今も覚えているのは、〈受験するなら生物の篠崎先生がいい〉と言われていました。理由は、〈自分で勉強するしかない

が、新制中学校での社会科「日本史」教科書が存在しなかったため、その後も1冊本として発行されて形式的には副教材として使用された。

¹⁶ ルコック探偵：フランスの作家E・ガポリオの1860～70年代の作品中の警官探偵。

¹⁷ バートン版：イギリスの探検家リチャード・バートンによる1880年代の英語訳。日本語に重訳された。

¹⁸ 立川文庫：1910年代から20年代前半にかけて立川文明堂から発行された約200冊の文庫本。

いから、すごく力が付く」というものでした（笑）。

西高校の生徒には変わった連中もいて、左派も多かったですね。当時はメーデー事件（1952年5月1日）とかあって、学校も騒然としていました。中には勉強ばかりして英和中辞典を全部覚えたという者もいました。みんなで試すと全部答えていました。

— 当時の高校社会科は1年次に一般社会で、2～3年次に選択科目であったはずですが、どのような授業でしたでしょうか¹⁹。

1年のときに一般社会でしたね。2～3年で世界史と地理を取りました。世界史の教科書は覚えていませんが、中教（中教出版）でしたか²⁰、あまり教科書を開いてという授業ではありませんでした。

石川澄雄先生の世界史は、ギリシア史から入って、ほとんどヨーロッパ史の授業でした。ドイツ近代史はとても面白かったです。エムス電報事件（1870年）について長々とやっていました（笑）。非常に印象に残っています。東洋史のことは、一応、やったことはやったと思いますが、さらっと流すくらいで、あまり詳しくはやらなかったです。

私たちのときの高校の日本史や世界史は、社会科教育ではなく、自分の得意のところをやって全体はやりません。その先生の専門によるんです。それで済んでいました。受験というのは別個なもので、自分で教科書・参考書でやりましたから。学校の授業で受験をというのは誰も考えていませんでした。

— 木下先生が大学で歴史を勉強しようと考えたのは、高校での世界史を受けてからですか。

歴史を勉強しようと思ったのは、高校に入る前でした。戦後に『少年百科²¹』という本が出ていました。メソポタミアの文明の話が出ていて、面白いと感じました。また英語を勉強した母からはイギリスの話聞いていましたし、父は神戸商業²²出身でスペイン語をやっていました。そういうところから興味を持っていました。高校生のときは、岩波新書（岩波書店）を読んでいました。受験参考書も何か使っていましたし、世界史については、他の本でいろいろ読んでいました。

それで、高校に入ったときに将来歴史を勉強すると決めていたわけではありませんが、進学するときは西洋史専攻を選びました。

¹⁹ 1951年度版と総称される学習指導要領が実施されていた時期で、社会科は1年次に「一般社会」（5単位）必修、2～3年次に「日本史」「世界史」「人文地理」「時事問題」（各5単位）から1科目選択であった。

²⁰ 1954～55年度の中教出版の世界史教科書は、三上次男・尾鍋輝彦・秀村欣二『世界史 改訂版』（中教出版、1953年6月発行）である。

²¹ 加藤健吉編『少年百科』日米出版社、全12集、1949～1951年。

²² 神戸高等商業学校（旧制）：後に神戸商業大学（旧制）となり、現在は神戸大学（兵庫県神戸市）となっている。

4. 東京教育大学文学部

— 進学された東京教育大学²³について、お聞かせ下さい。

1年浪人して、昭和32（1957）年に東京教育大学文学部に入学します。西洋史の学生は1学年で20人もいませんでした。同級生はだいたい高校の教員になっています。

指導教官は、イギリス史の穂積重行²⁴先生でした。東大法学部長をして今の天皇の教育係もした穂積重遠²⁵の息子さんです。それから、中世史を専門とする兼岩正夫²⁶先生がいましたし、講師でドイツ史の村瀬興雄²⁷先生が来ていました。村瀬先生は、東ドイツの史料集を使って訳していました。ナチス・ドイツの政権掌握直前の状況などをやっていて、とても面白かったです。

— 卒業論文では何を研究したのでしょうか。

フランス第二帝政期（1852～1870年）の社会動向についてやりました。木下半治²⁸先生という政治学の先生がいて、いろいろ教わりました。私はトクヴィル（Tocqueville）を読んでいた。あそこ大衆社会論が登場してきました。一方で、マルクスの階級闘争論がありましたが、私はそれからは離れて、大衆運動というものを側面から見ようという気が強かったです。なまかじりですが、第二帝政期のフランスの地方の動向を分析しようと思いましたが、なかなか物になりませんでした。史料が少ないし、フランス語は読んだのですが読み切れません。フランスに行って、アルヒーフ（文書館）を丹念にたどっていくと分かるのでしょうか。先生もあまり関心を持ってくれませんでした。

マルクス主義的な文献はずいぶん読まされましたけど、あまりピンと来ませんでした。それよりも、ホイジンガ²⁹の『中世の秋』とか、日本史では西岡虎之助³⁰の文化史や九鬼周造³¹の『「いき」の構造』などを紹介してもらって喜んで読んでいました。あの頃の流行からは離れた、文化史とか社会史とかに興味がありました。

— 木下先生が大学生であった1957～1960年は「60年安保³²」の時期ですが、いかがでしたか。

²³ 東京教育大学：東京都文京区にあった大学で、現在は筑波大学（茨城県つくば市など）となっている。

²⁴ 穂積重行：1921～2014年、西洋史専攻。

²⁵ 穂積重遠：1883～1951年、法学（民法）専攻。

²⁶ 兼岩正夫：1911～1984年、西洋史専攻。

²⁷ 村瀬興雄：1913～2000年、西洋史専攻。

²⁸ 木下半治：1900～1989年、政治学専攻。

²⁹ ヨハン・ホイジンガ：1872～1945年、オランダの歴史学者。『中世の秋』（1919年）は兼岩正夫・里見元一郎訳で創元社から1953年に発行された。

³⁰ 西岡虎之助：1895～1970年、日本史専攻。

³¹ 九鬼周造：1888～1941年、哲学専攻。『「いき」の構造』は1930年初版発行。

³² 60年安保：岸信介内閣が進める日米安全保障条約改定（1960年）をめぐる、戦後最大規模の反対運動が

たか。

60年安保を経験しました。60年安保に至る前からもデモとかありました。東京教育大は盛んでした。文学部はみんなが出かけて行っていました。私もデモに行きましたよ。そして、そのあとデモを離れてデモを見ていました。「何を興奮しているんだろう」というのが感想でした。ただ、そんなこと言うと「あいつは右翼だ」と言われますから(笑)。

ちょうど樺美智子^{かんば}さんが亡くなったとき(1960年6月15日)でしたから、興奮が湧き上がるわけですよ。自分もその日の午前中にデモにいたんですけど、銀座で解散してから、「興奮しているなあ」と眺めていました。あくる日に大学に行くと、頭に包帯を巻いた学生がたくさんいて、「ばれたら捕まるから隠れろ」なんて言い合っていました。

考えてみると、学生は興奮していましたが、お祭りで、本当は分かってないわけです。だいたい、みんなそうでした。革命というのは祭りだと、ルフェーブル(Henri Lefebvre)の言うような。私は足突っ込んでみて、離れてみてという感じでした。みんな興奮してワッと集まって盛り上がり、当たって砕けて何も変わらないという感じでした。

— 70年安保のときのほうが、いわば過激であったとも聞きますが。

70年のほうが過激ですよ。60年のときは、私がデモで傘を持って歩いていたら、横の警官が「傘の骨が危ないよ」と言って縛ってくれました。牧歌的でした。

5. 北海道と大阪での高校教師

— 大学を卒業して、すぐに教師になられたのですか。

大学を卒業した昭和36(1961)年に、北海道立の室蘭清水^{しみずがおか}丘高校(室蘭市増市町)の教師になります。

私は次男坊で、うちから離れたかったんですよ。たまたま大学の就職のところに、北海道というのが書いてあって、行ったことがないので面白かったです。このころ北海道は教員の成り手が少なく、本州で教員の募集をしていました。ですから、行くと喜んでくれました。教育委員会の人から言われたのは、「あなたは歴史だけど、国語はできるか」と、「できないことはないですよ」と答えると、「体育はできるか」と言われ、「体育はちょっと…」と答えました(笑)。北海道は僻地^{へきち}があるから、教科外担任をやらされる可能性があるため、「一応、聞いておく」という話でした。

北海道に行くことになったら、室蘭の校長先生が来て、つば付けていくんですよ。「採用試験を受けます」というと、「お前は通る」と言われました(笑)。東京で学生を集めていたんですね。「寮もあるから大丈夫だ」とも言われました。

展開された。

— 室蘭の高校はいかがでしたか。

4月に赴任するため、東京を、桜が咲いている中、出発しました。深夜の電車で行って、青函連絡船に乗りましたが、ちょうど嵐で、8時間で着くところ12時間かかりまして、行ったら真夜中でした。全然わからないのでタクシーに乗りましたが、降ろされたら周りに何も無い真っ暗なところでした。マンドリンをやっていたので、マンドリンを担いで、真っ暗の中を歩いていました。そうしたら5~6人の若いのが通りかかりましたので、彼らに聞いたら、「僕ら清水丘の生徒です」と寮まで案内してくれました。それは山岳部の連中で今でも付き合っています。

室蘭では5月・6月になると、突然にいつぱんに花が咲きます。毎日、生徒が寮に遊びに来ました。私が帰る前に5~6人部屋に入っています。それで駄弁たべんって帰ります。彼らのために、ちょうど出始めたインスタントコーヒーを買っておいてやっていましたが、ひと月で空き瓶が箱にいっぱいになりました。

— 担当されたのは世界史だけですか。

1学年8クラスの学校で、世界史を持ちました。2年目になるときに、就職する生徒用の社会科を担当してほしいと言われました。彼らは1年生で社会(社会科社会)を終えています。それとは別に就職者用の社会科2単位の授業が用意されていました。科目名は何でしたかね。しょうがないので、困って、マルクスの疎外論をやりました(笑)。岩波の思想選集のようなものがあって、『経済学哲学草稿』と一緒に読みました。分かったかどうかはともかく、疎外論以外にも思想の色々なものを1年間やりました。面白かったのですが、えらく苦勞した覚えがあります。その後「倫理・社会」ができました³³。ここでやった内容と重なるものがありました。そういう意味では「倫理・社会」を作ってしまったようなものでした(笑)。

室蘭清水丘高校には昭和38(1963)年まで、3年間いました。

— その後はどちらに行かれたのですか。

昭和39(1964)年に大阪教育大学附属高校池田校舎³⁴に移ります。本当は北海道に行ったあと、鹿児島に行こうと思っていました。池田校舎にいた私の友達が「急に家の都合で辞めて徳島に帰る。後任がいらないから来ないか」と言ってきました。2月の話です。急なので許されないかと思いつつ校長に相談したら、行けということになりました。当時、校

³³ 「倫理・社会」：1960年版高等学校学習指導要領により1963年度から学年進行で実施された科目。1978年版高等学校学習指導要領により1982年度からは「倫理」となって現在に至る。

³⁴ 大阪教育大学附属高等学校池田校舎：1968年までは大阪学芸大学附属高等学校池田校舎(大阪府池田市)。

舎移転の問題とかあり、若い教員が校長に文句を言っていました。学テ反対（全国一斉学力テスト反対闘争）とかのころで教職員組合の役員もやらされていましたし、校長にとっては「ちょうどいいや」ということだったかもしれません（笑）。大阪のほうでも急に人がいなくなるということで主任がわざわざ北海道まで面接に来てくれました。自分も驚きましたが、採用を理由に北海道旅行というところだったようです（笑）。

— 大阪教育大学附属高校池田校舎はどのような学校で、当時、どのようなことがありましたか。

こじんまりした学校で、はじめは1学年3クラスでした。生徒はみんな穏やかで、家族的な学校でした。昭和45（1970）年3月までいました。

このころに学校紛争がありました。大阪は激しかったです。附属もバリ封（バリケード封鎖）をやりました。3回か4回です。新聞には出ませんでしたが、それは父兄が新聞社にいて押さえてくれたからでした。リーダーになったのは西川純とって、後にオランダのハーグ大使館の占拠事件（1974年）を起こしました。ちょうど学校紛争のとき、私は社研（社会科学研究会）と新聞部と生徒指導部と組合の役員と全部やっていました。それらの事柄が、紛争にからむ事柄にいつべんにつながって来ました。生徒指導部長は年配の先生でしたが、身体を動かせるのは若い教師でしたから。

生徒がバリ封をやったときは、宿直室を占拠されました。泊まり込みで対応した教師は寝るところがないから、教官室に机を並べて仮寝をしました。私は山岳部の顧問もやっていたのでシュラフを持って行って、そこで一週間寝泊まりし、バリ封の生徒に「出てこい」などと声をかけていました。最後のバリ封のときでしたか、進学の時局が迫り、バリ封の生徒から、「調査書だけは出してくれないか」と言ってきました。私は「バリ封を解かなければ、書類が取り出せないの、だめだ」と応じました。

バリ封に際しては、卒業生となっていた西川がヘルメットにゲバ棒で、学校に押しかけてきました。私も30歳前後でしたから、身をはって止めようと思いました。彼は棒を持っていましたが、「殴れるものなら、殴ってみろ」と言うと、殴らないんです。西川は2～3年生のときに「自主ゼミをやりたい」と言ってきたので、見てやっていた。現代史について5～6人に教えたことがありました。彼は、関心はあるのですが、極端な理念的なことをいう生徒でした。彼には「お前、そんなこと言ったらだめだよ。歴史はもっと事実を見なくちゃ。革命はいいけども、社会から浮き上がって犯罪者になるよ」と言っていました。案の定でした。ただ、通じることは通じていました。私の耳元でダーッと怒鳴るものだから、「お前、歯が臭いぞ」と言うと、慌てて口を押さえたりしていました（笑）。かわいいところはあったんですけどね。

— その後、バリケード封鎖はどうなったのですか。

最後は、父兄から警察に話が行き、機動隊を出して、バリ封を解除するということにな

りました。大学のバリ封が解除されて、そこから大学生が高校のバリ封に入っているという情報が父兄に入ったためらしいです。私は高校生しかいないと知っていました。そこで、直前に声をかけて、「何人いるか」と聞くと、「10人くらい残っている」と。「機動隊が入ると逮捕されるから出る。今から退去勧告をする」と。「腕章をつけて私が歩いていこうから、そのあとをつけて来れば通れる」と、そうやって出しました。そのあとに機動隊が2個大隊でしたか、トラックで来て入口のバリケードを壊して、バツと入りました。あれはすごいですね、犯人逮捕が目的ですから。そして、教員がバリケードを壊すなど、後始末をしました。

学校紛争では、体育館とかに教員を入れて全校集会でつるし上げるんです。気の弱い先生は「気持ちは分かる」というのですが、私は「分からない」と言っていました。生徒は「職員会議を公開しろ」と言ってきましたが、「教職員として秘密を守る義務があるから、そんなことはできない。学生がバリ封をするように教員も見せたくないものがある。これは感情だ」と言ったら、黙ってしまいました（笑）。その後、バリ封になったあと、「木下は入れるな。あいつには逆洗脳される」と言われていたようです。あちこちに〈桃色帝国主義 木下〉と書かれていました。変な意味ではなく、赤まで行かないけどピンクだということでしょうか。私は「君らの処分をかならず主張するから」と言って、無期停学5人出しました。そのあと、リーダー格の生徒が私のところに来て「先生、ありがとうございました」と言ってきましたが、どういう意味だったのでしょうか（笑）。高校生から一番嫌われたのは「分かる、分かる」と言って何もしないで逃げている先生でしたね。高校生というのはぶつかる対象がほしいんですね。そういう経験をしました。その後もいろいろと渦中に引き込まれることが多かったのですが、この経験は役に立ちました。

6. 東京学芸大学附属高等学校

— 東京学芸大学附属高校³⁵に移られたときのことをお聞かせ下さい。

昭和45（1970）年から学大附属に移りました。昭和63（1988）年まで18年間勤めることとなります。世界史の先生がちょうど学校紛争の影響で学大附属を辞めることになりましたが、かわりに〈紛争校〉に来る教師は誰もいないということでした。学大附属の吉田寅³⁶先生が、大学の恩師であった穂積重行先生から私のことを聞いて、大阪教育大附属の紛争校にいるのならば大丈夫だろう（笑）ということで、私に話が来ました。

学大附属はまだ紛争の余波が残っていました。紛争の残党のような生徒たちが授業も出ないで校内でうろろしているのがいました。私はそういう生徒たちを捕まえては、何も知らないふりして、「何をしているんだ。授業に出ろ」と言っていました。無視されるより

³⁵ 東京学芸大学附属高等学校：後に東京学芸大学教育学部附属高等学校への改称を経て、現校名（東京都世田谷区）。

³⁶ 吉田寅：1926～2014年、東洋史専攻。

は、生徒は構われるほうがよかったです。3年くらいしたら紛争の影響は全部消えてしまい、それから入ってくる生徒はみんな陽気でした。

吉田先生とは学大附属に来てから知り合いました。本当に穏やかな先生で、学問的なことや学界の動向から、成果をどうまとめていくかまで、色々なことを教えてもらいました。母校の都立西高校（旧制・東京府立第十中学）の先輩にもあたりました。

— 東京学芸大学附属高校の世界史は木下先生と吉田先生のお二人ですか。また、東京にいらしてから、何か取り組まれたことがありましたか。

学大附属は1学年8クラスで、世界史は吉田先生と私の2名でした。附属高校はわりに自由にできますから、学習指導要領によらずに自分なりに世界史を構成してやっていました。学大の附属の研究会がありました。小学校・中学校の研究会にも行って学んでいました。

このころから「歴史学会」にも顔を出していました。東京教育大学の歴史研究者が筑波移転の問題³⁷で分裂してしまって、筑波移転に反対する人たちが組織したのが歴史学会でした。ただ、私は学外にいましたし、賛成派・反対派の両方の人と付き合いがありました。移転した筑波大には西洋史の西澤龍生先生が行っていました。西澤先生は面白い人で、私が学生のときには助手をしていました。スペイン史を研究していて、オルテガ (José Ortega y Gasset) も訳しています。

— はじめの頃の歴史学会の新『史潮』³⁸を見ると、木下先生のお名前がシンポジウムや翻訳に関わって掲載されています。

歴史学会の評議員だかをやっていました。シンポジウムを開催したり、コメントを引き受けたりしたことがありました。「サモリ帝国とイスラム」(岡倉登志)の報告へのコメントは誰も引き受け手がなくて、「世界史をやっているんだから」と私にまわってきました³⁹。ソ連の学者の論文の翻訳は、英語訳からの翻訳です⁴⁰。ただ、翻訳はしましたが、よく分かりませんでした。歴史学会は今でも若い優秀な人が多くて頑張っていますね。

— 「同時代史の会」についてお聞かせ下さい。

³⁷ 筑波移転問題：東京教育大学を茨城県の筑波に移転する構想に対して1960年代後半から1970年代初めにかけて賛否をめぐって展開した諸問題。特に文学部は反対が強かった。1973年に筑波大学が開学し、1978年に東京教育大学が開学した。

³⁸ 『史潮』：『史潮』は東京文科大学・東京教育大学に本部を置く大塚史学会が発行していた学術雑誌。1931年に創刊されて戦争中の中断を経て1974年に第113号で廃刊となった。その後、創設された歴史学会が1976年に新1号を発刊し、現在に至る。歴史学会の『史潮』は、一般に「新史潮」と呼ばれている。

³⁹ 木下康彦「コメント」『史潮』新20号、歴史学会、1986年11月。

⁴⁰ アー・エヌ・チストズヴォーノフ(木下康彦訳)「西ヨーロッパ絶対主義の形成と諸類型」『史潮』新13号、歴史学会、1983年10月。

都立高校の歴史の先生たちを中心に、資料集や辞典を作るときに集まって、「同時代史の会」というのを作りました。中心は望月照和先生でした。毎週、会を開いていました。全教員^{ぜんきょういん}などからいくつも本が出ています。そこで、世界史を同時代的に見ようという、そういう構想を出していました。このときに色々と考えた横並びの発想をもとに、後に文部省で「世界史A」を作りました（後述）。会のメンバーの中からも学習指導要領の協力者としてお願いしました。会は今も続いています。

— 学会や研究会に出席して、世界史については、どのようなことをお考えになりましたか。

世界史をやっていると、あらゆるところに目配りする必要があります。こういう会で色々な先生の話聞いて、どうなのかと疑問を持ちました。例えば、ヨーロッパではマルクス主義的な階級闘争で割り切るというのは60年代くらいから変わってきているんですね。70年代に入ると大きく変動します。そういうのを日本の学者も取り込んでいました。ウォーラーstein (Immanuel Wallerstein) の世界史システム論とか、フランク (Andre G. Frank) やアミン (Smir Amin) の従属論とか。あまりやると「あれは学問ではなく、評論だ」と言われますが(笑)。

ただ、世界史という高校で教えるところは、何か枠を作らないとだめで、ただ事実を並べるだけでは、生徒は興味を持ちません。そうするとその枠づくりをどうするか。それは中途半端でも、暫定的なものでも、仮住まいでも一応作っておかないと。それを盲目的に信じるのではなくて、自分がこういう組み立てができるんだよと、視点を変えればまた組み立てが変わるんだよと、そういう柔軟性をもって見ていかないと。教条主義でない修正主義も必要です。(絶対)と信じ込んでしまうと、世界の動きは見えません。このことは、後に学習指導要領を作るときにも考えました。自分の専門を出して「ここだ」とやるとできません。

— 山川出版社の『歴史と地理』にアメリカ独立革命の実践報告を書かれています⁴¹。

これは実際にやった授業を紹介したものです。

— 東京学芸大学附属高校にいらしたときに、他に世界史についてお考えになったことはありますか。

「青年の船」に参加しました。ペルシャ湾に行きましたが、イラン革命(1979年)が起

⁴¹ 木下康彦「植民地から新国家へ」(「私の実践報告・3 アメリカ独立革命」)『歴史と地理(世界史の研究)』第109号(通巻第315号)、山川出版社、1981年11月。

こりました。最初はペルセポリスとか行くはずでしたが、結局行けなくなってクウェートに行ったんです。ちょうどペルシャ湾に入ったときに革命が進行していて、毎日そのニュースが入ってきていました。クウェートでは銃を持った人たちが港でズラッと並んでいました。船の中で、訪問国事情というのを話します。イラン、イラク、クウェートなどイスラム教の諸国の大まかな歴史を話しました。日本の青年もいれば、イスラム諸国から来ている青年もいましたので、イスラム史を色々勉強しました。クウェートやパキスタンなどから来ている青年たちは、「木下先生は詳しい」とほめてくれました(笑)。彼らは信仰を持っていますから、イスラム全体を客観的にちょっと離れてみることはできないわけです。逆に我々は知らないものですから、離れて見るわけです。そうすると色々なものが見えてきます。

クウェートには、エジプトとかパキスタンとかパレスチナからも多くの人々が来ています。彼らはクウェートでは〈二流市民〉なわけです。同じアラブ語をしゃべっても、クウェート人はただそこに籍を持っているだけで利権を持って座っていて金が入ってくるわけです。実際にまじめに働いているのはエジプト人やパレスチナ人やパキスタン人でした。彼らに話を聞くと微妙な返答をするわけです。そういう話を聞いて、しばらくするとクウェートで紛争が起きて、「ああ、そうか」と思いました。それが行って分かりましたよ。

期間は冬の2か月間です。回によって違いますが、私たちが回ったのはシンガポール、ペルシャ湾に入ってクウェート、帰りにパキスタン、スリランカに行って帰ってきました。船内で講義を担当します。訪問する各国の歴史や文化の講義です。それ以外にも紅茶の歴史と海賊の歴史をやりました。インド西南部のマラバール海岸では交易船を襲撃する海賊が活動した歴史がありました。アラブ首長国連邦は、イギリスの貿易船などを襲撃する海賊船が活動していたために海賊海岸(Pirate Coast)と呼ばれ、19世紀中期にイギリスが海賊を率いていた首長たちと休戦条約を結んでから、休戦海岸(Trucial Coast)と呼ばれました。マダガスカルから西アジアまで海賊の活動がありました。その海賊の歴史を話しました。単位認定も試験もないし、船酔いという口実があるから休めるわけです。面白い話をしないと聞いてくれません。1日に1時間から2時間やればあとは自由ですから。青年の船での受講者は、大学生、一般社会人、訪問国から来ている人の300人くらいでした。

7. 文部省

— その後、赴任された文部省でのことをお聞かせ下さい。

昭和63(1988)年4月から文部省初等中等教育局の専任の教科調査官になります。その前から附属高校から協力者として、それから兼任の教科調査官としても文部省に行っていました。ただ、国立の附属高校は文部省の関係ですので、協力者や兼任になっても手当は出ません。しかも都内であるということで交通費も出ませんでした。気の毒だからと学芸大から交通費を出しますと言われましたが、面白いから行っていましたので、いらないと断りました。安上がりなので、附属の人を協力者にするのが多いんです。

— 協力者としては、どのような仕事をされたのですか。

世界史の指導資料の作成がありました。学習指導要領の指導書・解説書に加えて、指導資料があります。ここに昭和 57 (1982) 年の発行されなかった原稿があります。

— 拝見しますと、原稿の表紙は『高等学校「世界史」指導資料／「世界史」における教材構成の工夫／(案)／昭和 57 年／文部省』(「／」は改行)と書かれています。「昭和 55 年 3 月」を「昭和 57 年」に修正してありますし、「(第 1 次作業案)」の「1」を「2」に修正した後に、さらに全体を消して「(案)」に修正してあります。この原稿を入れた封筒には「世界史指導資料最終原稿在中」とあり、「57 7/6」(昭和 57 年 7 月 6 日)、「第 2 次作業案原稿検討完了」と手書きで書かれています。原稿は本文全 156 ページで、文部省の原稿用紙に手書きで書かれ、多くの修正がなされています。

これは世界史が必修になる前のもので、小俣盛男先生が教科調査官として担当されました。小俣先生は日本史ですが、世界史も兼ねていたときのものです。このときは、日本史などで対外的な配慮があったのでしょうか、出版されませんでした。

— 日本史で、ですか。

世界史はあまりないですね。日本史は色々クレームが付きます。近現代史とか。日本史は韓国とか国外からクレームがつくし、国内でも、農林省から「コメが古くから主食でなかったというのは困る」とか、外務省から「北方領土についてきちんと教えてくれないと困る」とか。

— 電力関係からとかもありませんか。

それは歴史よりは、地理と公民に対してですね。

もう一つのこの原稿は、その後の、必修になってからの世界史の指導資料で、出なかったものです。これは私が教科調査官として担当しました。このときの名簿もはさんであります。

— 拝見しますと、表題として『地理歴史科(世界史)指導資料』とあり、仮製本されていて、目次が 3 ページ、本文が 140 ページあります。名簿は「高等学校指導資料(世界史)作成協力者会議名簿」の他に、日本史と地理の名簿もあって、それぞれ 12~13 名の名前があります。これも日本史が問題となって、発行できなかったのでしょうか。

地理も内部でもめて遅れたのですが、このときも恐らく日本史に関しては様々な思惑が

省内にあったと考えられます。歴史の指導資料は前後3回も作って、たぶん日本史で問題が色々と考えられ、出せなかったと思われます。ただし、このとき公民は出ました⁴²。

中学までは教育論でいいのですが、高校になると学説が入ってきます。立場が専門的になります。なぜ文部省はこの説を採ったのかとなるので、難しいんです。一般書ならいいのですが、文部省となると国の方針が入ってくるから、そこは慎重にしないと、となってきます。

この発行できなかつた世界史指導資料の原型になったのが、こちらの冊子です⁴³。これは学習指導要領発表後に文部省が全国5か所で各県の指導主事等を対象に行なった講習会の資料です。指導資料と同時並行で執筆したものです。

— 教科調査官になられたときのことを伺います。前任者はどなたで、木下先生はどのような経緯で選ばれたのでしょうか。

世界史の前任者は星村平和先生です。星村先生の前は、平田嘉三⁴⁴先生ですね。星村先生が辞めた後、しばらく世界史の専任の教科調査官は置かれませんでした。日本史の小俣先生が世界史も兼ねてやっていました。学習指導要領を作るとなって、世界史の専任として私を入れました。私が辞めた後は、原田智仁先生が大学との兼任で入りました。

私は星村先生が教科調査官のときから協力者でやっていました。私の場合は世界史の必修ということもあったので、協力者の中から選ばれたのですね。推薦されて、色々な書類を出して、文部省内でいいだろうということになると決まります。協力者からなる人が多いです。だいたいそうです。

8. 学習指導要領の作成

— 木下先生が世界史の教科調査官になられたときは、世界史の必修や、高校社会科を地理歴史科と公民科にするとか、難しい時期であったと思いますが。

当時、地方の進学校で世界史は受験に不利だということでカリキュラムの中に世界史を置かない学校がいくつもありました。「世界史離し」という言葉も使われました。中央教育審議会や教育課程審議会⁴⁵で、一般企業の人から戦前の旧制中学でも東洋史・西洋史があったが、今の、中学から高校の段階で一度も外国史や世界史を習う機会がないのはどうし

⁴² 文部省『高等学校公民指導資料—指導計画の作成と学習指導の工夫—平成4年5月』（MESC1-9212）海文堂出版、1992年5月、目次等6頁、本文・付録171頁。本書には高等学校課長名の「まえがき」があり（1頁）、31名の作成協力者の氏名が掲載されている（2頁）。

⁴³ 文部省『平成3年度地区別高等学校教育課程講習会資料（地理歴史）』、目次2頁、本文128頁。

⁴⁴ 平田嘉三：1925～2008年、西洋史・世界史教育専攻。

⁴⁵ 教育課程審議会：1950年に設置された文部省内の審議会。2001年からは中央教育審議会に統合されている。

てだという強い意見が出ました。こうした意見を持っていたのが、中曽根康弘首相と議員であった林健太郎⁴⁶先生で、答申が具体的に出る前から、なぜ世界史や外国史のないカリキュラムを作っているんだとなって、それが文部大臣に降りてきました。また、地方の進学校での〈世界史離し〉はおかしい、国際理解のためにも世界史を必修にすべきだという主張もありました。

私が行ったときに最初に言われたことは、「先生、世界史必修ということは既定方針ですから、それだけは知っておいてください」と。もう既定方針であったわけです。私は聞かされていて、他の人はまだ知りませんでした。

— 誰からの話でしょうか。また、いつの話でしょうか。

高校課の課長補佐だった^{げにやまきみ}銭谷真美さんから、そつと言われました。後に、彼は初等中等教育局長そして事務次官になります。言われたのは、兼任でなったときだったかも知れません。総理大臣から降りてきたので、既定方針として、教育課程審議会の上のほうの審議会で決まって降りてきていました。それをどういう形でやるのかというのが、私の仕事でした。

— 高校社会科を地理歴史科と公民科に分けることもすでに決まっていたのでしょうか。

それはまだ決まっていなかった。世界史を必修にするということが決まって、では社会科をどうするか、省内で色々論議したんですね。学習指導要領では1つの教科について必修は4単位でした。世界史4単位を必修にして後の科目をどうするか、どこかに高校で選択しない科目が出てきますし、それで、おおもめに、もめたんですね。実際には、社会科を解体するためにやったのではなくて、世界史を必修にするためにやったものでした。

梶哲夫⁴⁷先生が会長をしていた日本社会科教育学会と、平田先生が会長をしていた全国社会科教育学会とが反対しました。公民の梶先生は、社会科をなくすことには大反対でした。世界史の平田先生は、「私は立場上反対するけどもね」とも言っていました。

— 高校社会科を2つに分けて、地理歴史科と公民科にするというのは、誰からの提案だったのでしょうか。

よく分かりませんが、行政のほうからで、教科調査官からではありません。社会科をどうするかという問題より前に、世界史必修という話が出てきて、残りの科目をバランスよく残していくにはどうするかという話になって、2つに分けたら公民の中でも4単位必修にできると。おそらくは初中局長（初等中等教育局長）だと思います。初中局長の私的懇

⁴⁶ 林健太郎：1913～2004年、西洋史専攻。1983年に自由民主党公認で参議院議員に当選していた。

⁴⁷ 梶哲夫：1925～2012年、社会科・公民教育専攻。

談会もありました。

— 世界史、日本史、地理を2単位のAと4単位のBに分けたのは、誰からの提案だったのでしょうか。

それは行政のほうからの話ではありません。ただ、誰からというのは分らないですね。おそらく行政も一緒になって話をしたとは思いますが。みんな4単位にすると選びようがないが、2単位ならばバランスが取れると。世界史を必修にする段階で、AとBにしたらどうかという話が出てきていました。

— 学習指導要領の告示が平成元（1989）年3月で、木下先生が専任の教科調査官になられたのが前年の昭和63（1988）年4月ですから、ほぼ1年で作ったということでしょうか。また、学習指導要領解説には協力者の一覧がありますが、世界史の学習指導要領作成の人選は木下先生が決めたのでしょうか。

そうです、1年で作りました。人選は外から決められた人も、私が頼んだ人もいます。解説の協力者一覧⁴⁸で言うと、大間一男・奥保喜・河内雅雄・桑島良平・設楽国広・中島正徳・原田智仁・宮崎正勝・吉田寅の先生がたは、私がお願いしました。木村尚三郎⁴⁹先生は、私は以前から知ってはいましたが、私が決めたものではありません。議員であった林健太郎先生が推薦したのかもしれませんが。外川継男・平野孝・山崎元一の先生がたは、木村先生の関係でしょうか。

— 座長はどなたでしょうか。

木村先生です。よく銭谷さんと一緒に木村先生のところに打ち合わせに行きました。

— 高校の先生がたはどのように選ばれたのですか。

東洋史・西洋史のバランスはだいたいとっていました。先ほどお話した「同時代史の会」のメンバーにもお願いしています。原田先生も前から知っていました。有能な人ですから、是非にということをお願いしました。

— 他の科目の教科調査官はどなたでしょうか。

日本史は小関洋治先生、地理は渋澤文隆先生、公民は柿沼利昭先生です。

⁴⁸ 文部省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版、1989年12月、2頁。

⁴⁹ 木村尚三郎：1930～2006年、西洋史専攻。

— 協力者であった吉田寅先生が言われるには、「だいたい木下先生が書いたんですよ」とのことでしたが。

色々な意見は聞きましたが、まとめる段階はみんな聞いていたらまとまりません。ですから、大枠だけ出して論議して、私がまとめました。人によりますが、座長の木村先生は「必修になればいいですよ。あとは任しておきますよ」と言って、特に何も言いませんでした。分科会は1年ずっと開きます。毎月ですね。地方から来る人は大変です。

— 学習指導要領において、地理歴史科と公民科に分けて、地理歴史科の目標はこうで、公民科の目標はこうで、社会科とはこう違うというのを作ったのは、事実上、木下先生でしょうか。

そうですね。「地歴科の」論理構成はね。もちろん、柿沼先生、渋澤先生、小関先生たちも関わって意見は入っていますが、骨子は私が作ったつもりでいます。

— 「理屈を付けろ」と言われたと漏れ承っていますが、ご苦労されましたか。

特に世界史がなぜ必修なのかということと言わなければいけません。それは世界史の立場で言わなくてはいけない。苦労はしましたが、こっちは必要だと思っていますから。一方で、地理や日本史のことも考えなくて、立てなくてはいけないでしょう。そこが難しいところです。木村先生は「世界史必修ならいいですよ。他はどうでも」なんて言っていました。「木村先生、そんなことを外で言うてはだめですよ」と言われていました(笑)。

— 解説のメンバーでそのような議論はあったのですか。

目標と内容については、こちらでやります。解説には新しく入った人もいます。二谷貞夫先生は途中から来なくなりました。

— 二谷先生は、はずれたのですか。

いえ、はずされました。表に立つような発言をしなればいけないのだけでも、二谷先生はどこかに出してしまいました。

— 文部省はそういうのをチェックしているのですか。

事務官がチェックしています。

— 世界史の学習指導要領そのものを書いたのは木下先生ですか。

世界史の「内容」の項目、つまり「(1)」「(2)」とか、「ア」「イ」とかの章立てはみんな
で決めています。これに短い解説を入れるようにと言われて、それは私が全部やりました。

— このときの学習指導要領は白表紙で案が公表されて（1989年2月）⁵⁰、1か月ほどで
正式なのが出ましたが（同年3月）⁵¹、社会科では戦争の名称とか、微妙に違ったこと
が報道されていました。

そうでしたね。

— 「世界史A」を作るにあたってのご苦労は、どのようなところにありましたか。

地域区分の問題と時代区分の問題がありました。地域区分では、北アフリカをどこにい
れるか、中東なのか、どうするかということがありました。

「中東」という言葉が根付いていますが、そもそもなぜ中東なのか。ヨーロッパから見
れば近東、中東、極東だけど、日本から見れば、西です。ですから、学習指導要領では中
東という言葉は使っていません。新聞とかはみんな中東ですよ。イスラム研究をする人
は、ドイツ・イギリス・フランスに行って研究するから中東という言葉を使います。最近
は直接イスラム諸国に行って研究する人が多いから、必ずしも中東とは言いません。やは
りおかしいわけです。それをどういうふうに表示するか、西洋・東洋に対して中洋にする
か、アフロ・アジア (Afro-Asia) にするか、色々と考えました。

時代区分の問題では、近代をいつで切るか、ルネサンスか、市民革命かということもあ
りました。そもそも「市民革命」という言葉はいいのか、英訳しようとするとも市民革命は
ブルジョワ・レボリューション (Bourgeois Revolution)、これはマルクス主義の用語なん
です。どこの国の歴史を見てもマルクス主義の用語以外に市民革命とは言わないんです。
それぞれフレンチ・レボリューション (French Revolution) とか、ピューリタン・レボリ
ューション (Puritan Revolution) とかですね。訳すときにそういう言葉が引っかかって
きます。ところが、中学校なんかは市民革命が固定用語になっていますから、「なんで外す
んだ」と言われて残りました。市民革命という概念や用語そのものももう一回検討しなく
てはいけないと感じました。こういうことは作るときにかなり苦労しました。

— 世界史のみで決められない部分もあるかと思うのですが、いかがでしたか。

⁵⁰ 高校の場合は、文部省『高等学校学習指導要領案 平成元年1月』（1989年1月）という冊子が作られて
いる。小中高の学習指導要領案は2月10日にマスコミに公表されて、翌日以後に新聞等で大きく取り上げ
られた。

⁵¹ 1989年3月15日の『官報』号外第4号に同日付で、「小学校学習指導要領」が文部省告示第24号として
「中学校学習指導要領」が同第25号として、「高等学校学習指導要領」が同第26号として公示された。

「近代」や「現代」という時代区分が日本史と世界史は違うんです。日本史では近現代は明治以降で、その前は「近世」という言葉を使います。ヨーロッパ史では近代ですが、あまりに長すぎるから、ヨーロッパ史のほうでも「Early Modern」を「Modern」と区別して近世という言葉を使い始めましたけど。ただし、そういう近世とか近代とかいう言葉を、そのまま東洋史や日本史に当てはめて、ちゃんと通用するのか、しませんよね。

ちょうど学習指導要領を作っているときに、歴史研究でもそういう論議があつて、時代区分、地域区分、社会史、世界システム、史料などのような問題提起が出てきました。難しいですね。

9. 『中等教育資料』での世界史の主張

— 文部省の月刊誌『中等教育資料⁵²』に木下先生が文部省在職時に書かれた文を調べましたら、昭和62（1987）年7月から平成8（1996）年12月までで、単著が44編、共著等が7編ありました。

正式な専任は昭和63（1988）年4月からですので、その前は兼任のときであつたかと思えます。『中等教育資料』は教科調査官が編集をします。執筆は教科に割り当てがあり、「次は誰の番だ」となります。しかも見開きで1ページですから、きれぎれで回数も分量も足りませんでした。これでは論文にもなりませんから、『初等教育資料』のように分量を増やすべきだと何度も主張していたのですが、他の教科の意見もあつて古い慣習は変えられませんでした。今も同じだと思います。ときどき特集がありますが、内容は基本的には執筆者に任せられていました。

— 原稿料とかはどうなっていたのですか。また、書いた内容で問題になったこととかはありましたか。

執筆は仕事ですから、原稿料はゼロです。外部に頼んだ人には払います。ただし非常に安いんです。書いた内容が問題になったことは、ありません。第一、そういう文章を書かないです。

— ただ、学習指導要領と比較して、内容を読みますと、変な言い方ですが〈卓袱台^{ちゆうぶだい}をひっくり返している〉ものもあつて感じましたが。

そうですね。だから私がいつも言っているのは、世界史は〈仮設住宅〉なんです。です

⁵² 『中等教育資料』：1952年創刊の文部省中学校課・高等学校課編集の月刊誌（現在は文部科学省教育課程課編集）。

から、本格的な建築はできないです。ずっと永遠に仮設です。世界史の全体像というのは文明論はともかくとして、なかなか、みんなできないです。歴史学は個々の実証をしなくては行けません、世界史は職人的な作業です。歴史学で作ったものを貼り合わせて、像を組み合わせて、その貼り合わず骨組み、これもまた仮設なんです。だから貼り合わせても何か変わると、バラッと崩れる。そういうことを繰り返してきています。

— 学習指導要領解説に書いたものは、ご自分の意見が反映されているとお考えになって
いますか。『中等教育資料』に書いたものには入っていると感じましたが、特にどのよう
な点に意識をされましたか。

解説は他教科や他科目との妥協がありますから、それはある程度妥協をしたものを書く
というものです。

あまり狭い歴史にこだわるなということですね、特に日本史に関して。日本から見たと
いうことを強調するけれども、やはり今の時代はグローバルに見るべきで、ちょっと離れ
て見ないと。べったりとその中に飛び込んだら、それこそ、摩擦がおきます。このことは、
韓国、中国、それからアメリカにも言いたいところですね。

— 近隣諸国などから直接に木下先生に来るような批判はありましたか。

それはありません。韓国に行きましたよ、教科調査官として洪澤先生たちと一緒に。独
立記念館（忠清南道天安市）とかに案内されました。「事実を見るのはいい、ただ過去の恨
みとか敵視するような教育は間違っている、未来に向けてやるような教育をしないとおか
しい」と言ったら、向こうの教育部（日本の文部科学省）の人は黙っていましたけどね。
韓国から教育部の人が日本に来て、案内したこともあります。

歴史認識論争をやっていますが、なにか表面的でつまらないことでやっていますね。も
っと基本的にやればと思います。

— 学習指導要領やその解説で書いた時点では想定しなかったことを、『中等教育資料』で
書いているとも感じましたが。

ソ連が崩壊しました（1991年）。学習指導要領などを全部書き直すかという話も出ま
した。特に解説書を書き直すという話はありません。ただ、学習指導要領自体が、階級闘
争史観とか革命史観とか、ソ連寄りのことは書いていませんでしたから、書き直す必要は
ありませんでした。

出したときは、だいぶ批判されました。そんなことはないと思っていますが、「歴史の変
革をどこにも学んでいない」とか。講習会でも、みんなから言われました。ソ連・中国を
はじめとする当時の社会主義国家はある種の全体主義国家でしたが、「自由主義と社会主義
の対立はおかしい。資本主義と社会主義だ」とか。ロシア史研究自身がすでにずいぶん変

わっていましたが、現場は相変わらずマルクス・レーニンでしたね。スターリンは否定されましたが、レーニンは否定されていませんでした。毛沢東もそうです。

— 『中等教育資料』では入試や評価のあり方も取り上げていますが、木下先生ご自身が大学を受験されたときはどのような試験でしたか。

当時の世界史の入試は、○×での問題でした。基本的な用語を調べるのにはいいのですが、歴史的思考力は全くないですね。知っているか、いないかだけです。何のための評価かを考えずにやっているからです。ただ、基本的なことは覚えさせたほうがいいです。

— 『中等教育資料』では、そもそも歴史を学ぶこととはとか、歴史教育の見直しとか、根本を追求する話も出てきます。

固定観念で、従来の歴史の見方を踏襲していたのでは、分かりません。どんなものでも柔軟に、新しい事態に対して修正していくことができないと。〈修正主義〉というのは日本ではマイナスイメージですが、古い思考の枠組を絶対視するのはドグマであり、歴史は新しい事実の発見や解釈をとり入れた修正も必要です。ある一定の時期や立場で書かれた歴史を、それが真実だと信じ込むのは歴史として非常に困るということです。変わっているのですから。今が変われば、過去の見方も変わるのは、当然なのです。そういうのを知らないのは困ると言い続けました。世界恐慌下でソ連だけが伸びるというのも、そうですよね。スパンのとり方を変えて1次大戦から見るとロシアはどん底まで行って、少し伸びたというのが実際です。そういう読み方をしなければ。

— 木下先生がこれまでに指摘していたことが結局そのまま来てしまっていますが、何が一番問題なのでしょう。

特に大学の場合は、業績を蓄積するために狭いところで一生懸命緻密にやりますが、それが大きな構造につながらないんですね、大きな構造が示されていないから、どこに付けていいのかわからない。誰かが仮説でもいいから出してきて、そこにみんなが貼り付けていて、どんな像ができるかということをやらないと。だめならば壊していけばいいんです。そういうダイナミックな動きがないと、狭いところで詳細にやっても、そこは穴の中に閉じこもる、進歩がない。ピケティ (Thomas Piketty) なんかも大きな流れを見ようとしていますよね。まず業績を上げなくてはいけないということで、日本ではなかなかできないんです。それがいま問題かなと思います。

— 平成 5 (1993) 年に視学官になられていますが、教科調査官と視学官はどのような違いがあるのですか。

教科調査官は専門の教科だけをやるんです。視学官というのは教育全般を何でもやるんです。教科調査官は教科・科目の数、視学官は7～8人です。

— 視学官のほうが、いわば〈上〉なのでしょうか。また、何か条件があるのでしょうか。

視学官のほうが上です。特に長くいるとなるのかと思いますが、条件は分かりませんが、ならない人もいますから。視学官は分担して全国の教育事情を視察して回る、それが主な仕事です。私も各県を回りました。

基本的には教科調査官が視学官になっていきます。教科書調査官からなる人もいます。事務方^{かた}からなる人もいます。視学官のあとにはだいたい大学に出ますね。視学官になって定年までという人はあまりいません。

視学官がほしい理科に1人、社会科に1人いて、まとめ役になります。地歴・公民のまとめ役は視学官であった公民の柿沼先生でしたが、学習指導要領がもめましたので彼はとても苦労しました。蕁麻疹^{じんましん}になるほどでしたが、埼玉大に移ったら1週間で治ったと言っていました(笑)。

10. 岐阜大学

— その後、岐阜大学教育学部教授になられますが、文部省視学官も兼ねていたのでしょうか。

平成6(1994)年4月から岐阜大学(岐阜県岐阜市)に移ります。ただし、1年間は文部省との兼任でした。国立大学の文部教官でしたので、文部省のほうは無給で、交通費しか出ませんでした。岐阜大に社会科教育のプロパーはいませんでした。社会科教育担当で、しばらくやっていたのですが、その後、生涯教育の新しいコースの立ち上げを頼られました。社会教育はありましたが、生涯教育はやる人がいませんでした。各自治体でも生涯学習の基本構想を作ることになり、現在は実施段階に入っています。生涯学習概論の講義は今も続けています。学部長も2年間、ちょうど国立大学法人になる前の混乱期で、どうして生き残るかというときでした。

— 岐阜大学にいらしたときに、山川出版社の『世界史へ 新しい歴史像をもとめて』(1998年)に、「カルチュラル・リテラシーとしての世界史」を執筆されています⁵³。

この本は、もとは遠藤伸一郎先生が企画を持ち込んできて始まりました。構成は、私が考えました。メンバーは、遠藤先生と私とでお願いして書いてもらいました。

⁵³ 木下康彦「カルチュラル・リテラシーとしての世界史 —学校教育の中の世界史—」(権山紘一・木下康彦・遠藤伸一郎編『世界史へ 新しい歴史像をもとめて』山川出版社、1998年)。

「カルチュラル・リテラシーとしての世界史」では、市民としての教養としてみんなが持っていき、あまりナショナリズムとかで偏ったものでなく、少し広く、国家と同時に社会を考えて社会の基盤を存続させていく、そういういわゆる教養というか、一般の国民が身に付けるべき歴史意識というか歴史感覚というか、そういうものを、学校や大学で考えて行かなければと主張しました。あまり専門性だけでもだめですね。そういうことを考えました。

実は、これは長すぎるからと言われて途中で切られたものです。もとの原稿はここにあります。本書掲載の論文では、「歴史の変動期に生きる」から、「歴史学の中の世界史」、「学校教育の中の世界史—「社会科解体」と「世界史」必修」、「社会科の理念と高校の「世界史」、「歴史教育と教育課程」、「歴史教育・教科書・教室」と来て、「歴史教育と「国民」で終わりですが、本当はさらに「戦争についての歴史認識」、「歴史の遠近法」と A4 で 6 ページほど続いていました。半分に切ってしまいました。

— 『世界史へ』への大江一道先生の書評⁵⁴を見ると、本書は木下先生の論文を最初に読むべきであるとされています。

そうでしたか(笑)。私も大江先生の本(『世界近現代史全史』I～III、山川出版社、1991～1997年)の書評を書きました⁵⁵。丹念に書かれた、すごい本ですよ。大江先生は都立上野高校(東京都台東区)にいらしたかたです。

— こちらの繁体字(旧字体)の中国語で書かれた資料(『亜太地区整合型社会科課程国際検討会 研究会討論集⁵⁶』)についてお聞かせ下さい。

これは教育学部長のときに、平成12(2000)年6月に台湾で開催された社会科教育のシンポジウムで報告したものです。「亜太地区」というのは「アジア・太平洋地区」のことです。森茂岳雄先生も一緒でした。タイトルは「日本の社会科歴史教育の諸課題⁵⁷」というものです。掲載されているのはレジュメですが、日本語で文章にまとめたものもあります。通訳してもらっての発表でした。日本の社会科歴史教育の課題を通して、「共存」のための「歴史教育」を主張してきました。

— 世界史Aの教科書をはじめに執筆されたのは、岐阜大にいらした時期と思いますが。

⁵⁴ 大江一道「書評 権山紘一・木下康彦・遠藤伸一郎編『世界史へ—新しい歴史像をもとめて』『歴史と地理(世界史の研究)』第176号(通巻516号)、1998年8月。

⁵⁵ 木下康彦「書評 大江一道著『世界近現代史全史I』『歴史と地理(世界史の研究)』第149号(通巻435号)、1991年11月。

⁵⁶ 『亜太地区整合型社会科課程国際検討会 研究会討論集』国立台北師範学院社会科教育学系、中華民国89(2000)年6月。

⁵⁷ 木下康彦「日本社会科的統整模式与課程發展——以歴史教育為中心——」

清水書院から世界史 A の教科書を出しました⁵⁸。原田智仁先生も入っていました。著作者に「他1名」となっているのは、教科調査官をしていた原田先生です。

— 本文が各節2ページあって、コラムが1ページという書き方をしています。

コラムの小見出しを面白くしようというのは私の提案でした。コラムでは好きなものを書きました。「ルイ14世をめぐる女性」、「ココ＝シャネルとファッションの美学」「独裁者スターリンの性格」、「敵のイメージ」、「ワルシャワの悲劇と東欧社会主義」などは、私が書きました。「敵のイメージ」は問題にされるかと思いましたが、大丈夫でした。検定ではいろいろ出ましたけど、特に問題になるようなことはありませんでした。検定では教科書の筆者は教科書調査官には分かりませんが、私の書いたようなことを問題にするような人はいないと思っていました。教科書調査官はみんな知っていますから（笑）。

これが改訂版教科書の指導書⁵⁹です。指導書は面白かったですね。科学と技術とか、大衆社会とかも書いてみました。こういうのを誰も書かないわけです。ただ、ここで「アルメニアの虐殺」（1915年等）を書いたら、「先生、このようなのは」と言われてボツになりました。

— コラム「ワルシャワの悲劇と東欧社会主義」では、ワルシャワ蜂起（1944年8～10月）を取り上げて、映画「地下水道」（1956年）も紹介しています。

ポーランドの歴史には前から関心を持っていました。アンジェイ・ワイダ（Andrzej Wajda）監督の映画には「灰とダイヤモンド」（1958年）などもありました。以前は、このようなものを書いても、すべて編集者からボツにされた時代でした。私ははずれましたが、清水書院の世界史Aは今も続いています。

11. 中部学院大学

— 岐阜大学を定年で退職された後に勤務された中部学院大学についてお聞かせ下さい。

岐阜大学を退職してから2年ほど空けて、中部学院大学（岐阜県関市・各務原市）に勤めました。中部学院はクリスチャン系ですが、特定の宗派はありません。平成15（2003）年から一昨年の平成26（2014）年まで、10年間です。新しい学部を作るということで、来

⁵⁸ 木下康彦ほか8名『高等学校世界史A 世界の歴史を多角的に視る55テーマとコラム』清水書院、2002年4月4日検定、2003年2月10日発行。および、木下康彦ほか8名『高等学校世界史A 改訂版 世界の歴史を多角的に視る55テーマとコラム』清水書院、2006年3月20日検定、2007年2月10日発行。

⁵⁹ 『高等学校世界史A 改訂版 指導と研究』清水書院、2007年。

てくれないかと声をかけられました。人間福祉学部に子ども福祉学科を作り（2006年）、それが子ども学部子ども学科になって（2007年）、さらに教育学部子ども教育学科になりました（2015年）。子ども福祉学科を作るときの立ち上げをやりました。東京の家から通って、週3日間、ビジネスホテルに泊まって勤めました。

— どのような講義を担当されたのでしょうか。

社会科教育も後に担当しましたが、中部学院では社会教育と福祉教育を主に担当しました。この『福祉科教育法の構築と展開⁶⁰』という本は、このときに作ったものです。生徒指導論や介護教員講習会なども担当しました。

小学校社会科教育（「社会科教育論（小学校）」）では、講義の前半は社会科学の内容、後半は学習指導の実際を教えました。

— 社会そのものを学んだ上で、社会科教育に入っていくということでしょうか。

そうです。岩波新書の『社会学入門⁶¹』を読ませて、考えさせることから始めました。テストはありませんが、毎時間、設問に対応したレポートを合計で15回書かせて評価しました。非常にレベルの高いレポートを書いてくる学生がたくさんいました。

— 「学習指導要領と世界史教科書の変遷⁶²」を山川出版社の『歴史と地理』に書かれたのは中部学院大学にいらした時期と存じますが。

これは、『歴史と地理（世界史の研究）』の第200号のときに依頼されたものです。第100号での吉田寅先生の論文を引き継ぎました⁶³。後半で山川出版社の世界史教科書の変遷を取り上げていますが、原稿で〈山川の教科書は学習指導要領よりも影響力が強い〉と実態を書いたら、編集のほうから意見がついて削除しました（笑）。

12. 再び「世界史A」について

— 「世界史A」について、再度うかがいます。「世界史A」というのは、木下先生から見て、どのような優れた特徴があるとお考えですか。

「世界史A」というのは、非常に自由に構成できる、面白い科目です。近現代史を中心

⁶⁰ 阪野貢・木下康彦編著『福祉科教育法の構築と展開』角川学芸出版、2007年。

⁶¹ 見田宗介『社会学入門—人間と社会の未来—』岩波書店、2006年。

⁶² 木下康彦「学習指導要領と世界史教科書の変遷」『歴史と地理（世界史の研究）』第200号（通巻第576号）、2004年8月。

⁶³ 吉田寅「世界史教育の変遷」『歴史と地理（世界史の研究）』第100号（通巻268号）、1979年。

としていますが、枠組みとしては前近代の世界を自由にグローバルな形で捉えていきます。グローバリズムというのは、近現代のものではなく、ずっと古くからあるんです。古代のローマ時代からも。そういう視点で見て行くと、今まで近代国家の視点から逆算して、歴史を区切って見ていきましたが、そうではなく、グローバルなものがもともとあったはずです。

学習指導要領の「世界史 A」は、完全なものではありません。ここでは枠組みのみを示して、自由度を示したわけです。ですから、自由に構成できるわけです、大学受験にも関係なしにできるし、教師にとって非常に面白いと思います。現代の色々な出来事から問題提起をして、そこから資料を集めていって、もとを見る。そういう取り扱いができるんですね。

— 「世界史 A」は、平成元（1989）年と平成 10（1998）年の学習指導要領では違いがあると感じていますが、いかがですか。

またちょっと変わってきましたね。近藤和彦先生たちが入って、少しヨーロッパ中心に変わってきたみたいです。

— 木下先生が世界史を見るときの基盤となったものは、何であったのでしょうか。

学生時代にトクヴィルのようなものを読んでいましたので、そういう見方がどこかにあるかと思います。革命というのは階級闘争ではない、大衆の運動というのは不確かなものだと。エーリッヒ・フロム（Erich Fromm）も読みました。ああいう大衆社会論が一時盛んになっていました。そういうことから、ただ階級というものでなくて、大衆の動きをその場に降りて見て行くという、コルバン（Alain Corbin）などの歴史、集団心理とか、思想でなくて意識とか、集団意識とはどういうものか、興味がありました。

もう一つは、後にヘイドン・ホワイト（Hayden White）が歴史記述についてメタヒストリーというのを出しました。あれも歴史記述で物語を作っていくとき、一つの歴史世界が歴史的事実とは別に作られていくということですね。翻訳が出ると言っていますが、『思想』とか『現代思想』とかで紹介されました。

事実や歴史事象がまずあって、それを生徒たちが、どのように自分の心の中でストーリーとして言語で構築し、イメージとして歴史を認識していくかということですね。

13. その後の取り組み

— 現在、高校の教育課程の検討で、「歴史総合」と呼ばれる科目の検討が進められていますが、どのように思われますか。

世界史の比重が小さくなっているのは、日本史の巻き返しなんじゃないかな。現代史とし

て総合的に捉えるのならいいのだけれども、日本から見たものとなると問題ですね。こうなると、やはりナショナリズムが強くなってしまいます。これが非常に危険ですよ。

— 最近の取り組みについてお聞かせ下さい。

先ほどお話しました「同時代史の会」は、日下部公昭先生を中心に月に1回の研究会を続けています。昨年（2015年）11月には私が「歴史教育の基礎的概念としてのナショナリズムの検討」の報告をしました。ナショナリズムを考え直そうという内容です。

— 最後に伺います。木下先生は、歴史教育に求められる市民としての知や最低限の素養とは、どのようなものとお考えですか。

一つは、人類史のおおまかな知識を持っていることです。それともう一つは、現在も色々な言論がありますが、あまり極端なものには、それに対するブレーキをみんなが持っていることです。そうでないと、ナチスでもソ連でもブレーキがなかったので、そこを大衆が走って行って、とんでもないことになるんですよ。みんなが引き留めるだけのものを持っていないといけないと思います。

— 長時間にわたりお話を聞かせて下さりまして、本当にありがとうございました。

後記

お忙しい中、インタビューのお願いを快くお引き受け下さり、興味深い多くのお話を伺い、また、歴史教育史に関わる貴重な資料も拝見することができた。歴史教師としての体験も大変に興味深い内容であったが、教育行政に関わり体験されたお話は、通常では得がたい非常に貴重な情報を含んでいるものと思われる。

最後に、原稿をまとめる段階においても多くのご教示や資料を下さるなど、多大なるご協力を頂きました木下康彦先生に、心から御礼を申し上げます。

（注記に関して、さまざまな文献やホームページの情報を利用して頂きましたことを申し添えます。）

（文責：茨木智志）